コズミック・イラに転生者多数発生

結晶犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コズミック・イラに転生者多数発生

【Ｎコード】
Ｎ３０４３Ｙ

【作者名】
結晶犬

【あらすじ】
『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』の世界に、不特定多数の転生者が発生した模様である。彼らは皆それぞれ生きていく。チート能力なし、あるのはただ自分の体と原作のストーリーと大まかな歴史の流れのみ。彼らはたったそれだけで何をなすのか、これはそういう話である。

第一話【テイクオフ】（前書き）

この度は、この小説をご覧になって頂き、真にありがとうございます。
このＳＳは、転生ものです。

ただし、チートはありません。神様とかそんなの出ません。
ただ純粋に転生者たちが戦っていくお話です。勿論、原作キャラも出ます。

原作キャラの家族になったりするものもいます。転生者達も簡単に死んだりしたりします。
それでも良いというお方は、どうぞ。

第一話【テイクオフ】

L5（ラグランジュ）に浮かぶ銀色に輝く砂時計。プラントと呼ばれるそれは、勿論のことだがただ浮かんでいるのではない。

スペースコロニーと呼ばれる建造物の一種であるプラントは、従来の形状の密閉型のコロニーとは異なり、新世代コロニーである砂時計の形をしている。

そして、そこに住む者らもまた、今までの人類とは少しばかり違う者達であった。

コーディネイター。そう呼ばれる彼らは、遺伝子を操作され、今までの人類と比べて超人的な能力を得た。そしてその名の通り、コーディネイター（調停者）という使命を持っている新たな人類であると思っていた。

だが、『出る杭は打たれる』という言葉の通り、コーディネイターでないナチュラルと呼ばれるコーディネイターでない旧人類の権力者達は、コーディネイターを恐れた。何れ彼らコーディネイターが、自分達の地位を奪うのではないのかと。

だからこそ、ナチュラルである彼らはコーディネイターを排斥した。その結果、安住の地を求めたコーディネイターは宇宙に進出した。

元々、ナチュラルに比べて身体能力が高いコーディネイターは宇宙でその力を思う存分発揮した。そして、作り出したのだ。彼らは、自分達の国プラントを作った――――はずだったのだ。

悲しいことではあるのだが、確かにプラントを作ったのは紛れも無いコーディネイター達だ。だが、プラントを作るための資金を出したのは？　そしてプラントを実際に所有しているのは？
答えはナチュラルだ。プラント理事国と呼ばれる国々が、プラントを所有しているのだ。

手にしたと思っていた自分達の国。確かに実際には違うかもしれない。だがそれでも理性で理解していたとしても、彼らの感情は納得するだろうか？
その答えは、納得しなかった、だ。

例え新人類だの、コーディネイター（調停者）等と言われていても、彼らもまた、人間であったということなのだ。

そして、C．E．69年9月6日。
この日を境に、遂に世界は動き始める。一本来ならいる筈のない存在とともに《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

■■■□□□■■■

チクタクチクタクと懐中時計の秒針が動き続けるのを、黒髪の男――アレクサンドロ・スターリンは両手でしっかりと持ちながらじっと見ている。
そして、秒針が時を刻む音は異様なほど彼がいる室内の中に響き渡っていた。
外からの音は一切無い。何故なら、彼がいるのは宇宙船――――より正確に言えば、宇宙駆逐艦の艦橋（ブリッジ）だからだ。故に、彼が座るシートの近くにある壁の向こう側は宇宙空間であり、真空空間であるそ

こに音など無い。

「遅れまして、申し訳ございません」

ずっとそのままの沈黙の時間が過ぎていくのかと思いきや、四十代くらいの灰色の髪が目立つ男が後ろから話しかけずっと続いていた沈黙を破った。

「構わんさ。特に問題も無いからな。座りたまえ、シリウス艦長？」

「了解です。スターリン将軍」

シリウスと呼ばれたその男の名は、シリウス・アレクセーエフ。アレクサンドロに言われた通り、彼はこの艦の艦長であった。

だが、先ほどの会話の内容を考慮するに、二人の立場は明らかにアレクサンドロの方が上であるようだ。

だが、それは特に問題ではない。プラントでは能力が高い者が上に行く。遺伝子を操作されて世に生を受けたコーディネイターは、能力の高さが社会での地位を指し示すと考えているからだ。無論、それは分野ごとによってだが。

そして、シリウスが艦長という役職で、アレクサンドロが将軍ということは、アレクサンドロの方が能力が高いということを指す。

「……しかし、未だ動きが無いというのは、少々怖いですな」

艦長席（キャプテンシート）に座ったシリウスはアレクサンドロにそう問いかけた。

「おいおい、そう簡単に動くような馬鹿じゃないんだ。曲がりなり

にも、向こうはプロの軍人だぞ？」

「ですが、発表から既に六時間。そろそろ、何らかのアクションを起こす筈だと思うのですが…」

「動くさ。地上にいる権力者達は、どいつもこいつも自分達の権益を守ることに関しては世界中探しても、奴等の上に立てるような奴はいないよ」

何が面白いのか、クククと不適に笑うアレクサンドロにシリウスは少しばかりため息をつく。

「まっ、どちらにせよ、俺達ＺＡＦＴがやることは変わらんさ。ただ敵を殺す。効率良く……な」

その言葉に艦橋（ブリッジ）の空気が重くなる。分かっていたとしても、クルーの間には少しばかり罪悪感があるのだ。そう、この後何が起こるか知っている彼らは。

「……その通りで御座いますな。我々はプラントの剣。武器はただ、相手を最も効率良く殺す方法だけを考えていればよろしいですな」

「そうだぞ。分かっているじゃないか、シリウス」

クククと、いかにも悪役という言葉が似合うような笑みを浮かべながらアレクサンドロはモニターを見る。

そこに映し出されているのはプラントの象徴とも言える白銀に輝く巨大な砂時計と、縦にあるコロニーとはまた別にある横に並べられたような一つのプラントのコロニーほどではないにしても、巨大

な宇宙ステーションが映し出されていた。
アレこそが、アレクサンドロ達ＺＡＦＴが狙うプラント駐留艦隊がいる軍事ステーションである。

「……七年、思いの外、長かったですな」

「……そうだな…」

唐突にシリウスが呟いた。今の一言がどういう意味なのか、それはこの艦橋（ブリッジ）にいる全員が分かっている。
今日という日が、歴史の分かれ目であるのだから。

「ッ、司令部より入電！　『剣を解き放つ時来たり』！」

「……漸く来たか」

オペレーターの言葉にアレクサンドロは笑う。彼の視線にあるモニターには先程とあまり変わらない映像が映っていたが、それは変わり始める。

「駐留艦隊が発進を始めました！」

「規模は！？　籍は何処の国だ！？」

シリウスがオペレーターに問いかける。その顔には先程までの感慨深いような雰囲気は一切無い。いかにも指揮官という言葉が様になっているような顔であった。

「ハッ！　規模は……ネルソン級４、ドレイク級７！　籍は…東アジア共和国です！」

その言葉を聞くとシリウスはアレクサンドロの方を見やる。そして思う。この人についてきて正解だったと。

「……将軍」

「言わなくていいだろう？　艦長？」

「了解です。全艦、第二戦闘配置につけ！　これより、オペレーション・テイクオフをフェイズ２に移行する！」

「了解！　ローラシアより、全艦に通達！　オペレーション・テイクオフ、フェイズ２に移行！　繰り返す、フェイズ２に移行！」

オペレーターの言葉に艦橋（ブリッジ）全体に緊張が走り出す。皆がそれぞれ自分達に与えられている仕事に精を出す中、アレクサンドロは一人ただ先程と同じように懐中時計を眺めていた。

だが、先程とは少しだけある一点が違う。今度は笑っている。顔に笑みを浮かべながら、アレクサンドロはじっと懐中時計を見ていた。

■■■□□□■■■

一方その頃、プラントユニウスセブンの宇宙港にある倉庫のとある大きな部屋に四十名程度の人間が集まっていた。部屋の奥にはプラントを模した旗があり、ここがＺＡＦＴの関係者達が集まっている場だと思わせる。

皆、これから起こるであろう戦いに、意気揚々とした心境なのだろう。暗い表情の者は殆どいない。
無論いるにはいる。その中の一人、アルベルト・ホークは壁に背を預けて、ただ他の者達が意気揚々としている姿を見ていた。

アルベルトはあの輪の中には入れない。確かに入ろうと思えば入れなくは無いのだが、何故だか彼の心がそれを邪魔する。
これから自分が行くのは戦場。運がなければ、戦うことすらできずに死んでいくことすらある。それをアルベルトは分かっているからこそ、あそこまで能天気になれないのだ。些かネガティブに考えすぎではないかと彼自身も思っているのだが、どうしてもこれだけは直せないと、彼自身前からよく思っているのだ。

「なーに、ボケッーーとしてるのよ。アンタ」

「……エリザベス…」

自分に向かってきた声に反応して顔を向けてみると、右隣に訓練校からの友人であるエリザベス・リドリーがそこに立っていた。

「…別に、なんでもないよ」

「なんでもない〜〜〜？　だったら、そんな暗い空気出さないでくんない？」

「……そんな空気出してたかな？」

「出してた」

「ハハ、そっか」

乾いた笑い。だがそれが、アルベルトの心境を表していた。
それ故にだろう。それ故にエリザベスは問いかける
「……アンタさ、そんなに死ぬのが怖いんなら、何でここにいるのよ？」
「…え？」
エリザベスの問いかけにアルベルトは一瞬答えることができなかった。
まさか、出撃前にそんな質問をされるとは、アルベルト自身微塵も考えていなかったからだ。
この問答は今までも二人の間であった。そして、何時も言われてアルベルトも思い出す。答えなんて決まっていたことなのだと。
「……守りたいから」
「……でしょ？　だったら、しゃんとしなさい」
「ありがとう。エリザベス」
「……ったく、毎回世話が焼けるわよ」
この会話もいったい何度になるのだろう？　そう思いながらエリザベスは気づく。アルベルトがエリザベスに向かって拳を突きつけていることに。
「何これ？」

「えっと、気合を込める的な？」

「……ハァ～～～。分かったわよ」

そう言って、エリザベスも拳を合わせる。

「生きて帰る」

「ハイハイ、分かってるわよ。やられないように気をつけなさい？
主人公？」

「ん。ありが「聞けお前ら！！　オイ、聞け！！　これから作戦を説明すっぞ！！」……」

ありがとう。そう言おうとしたアルベルトであったが、突然やってきた男の声によってそれを言うことはできなかった。

「ふふ、じゃあ、また後でね」

そう言ってエリザベスはアルベルトの元から離れて彼女の所属している隊の元へと行った。

そしてアルベルトもまた、自分の隊の元へと向かったのであった。

先程の声の主であろう褐色の男をはじめとする男達は部屋の奥に立ち、今まで部屋にいたアルベルトたちはそちらへと集まった。

「まず、自己紹介からだ。俺の名前はデューク・エルスマン。とりあえず、お前達の上官、つまり大隊長だ。分かったな？」

デューク・エルスマン。ぶっきらぼうにそう名乗った時、アルベルトはエルスマンというファミリーネームに引っ掛かりを覚えた。
エルスマンという名前を聞けば、プラントにいる九割九分の人間は次の人間の名を上げるだろう。タッド・エルスマン、と。だが、九割九分という言葉の通り、別の人間の名を上げる者もいる。その内の一人がアルベルトだ。
では、誰の名を上げるのか？　そう問われれば、アルベルトはこう答える。ディアッカ・エルスマン、と。

ディアッカ・エルスマン。タッド・エルスマンの息子であるのだが、今はまだプラントで学生という身分の筈だ。故に、アルベルトが彼のことを知る術などない。
しかし、現実としてアルベルトはディアッカ・エルスマンのことを知っている。だがそれは、アルベルトだけではない。先程のエリザベスもそうだ。他にもこの場にはいる筈だろう。アルベルトやエリザベス同じ存在が。

「早速だが、時間が無い。作戦は簡単に説明する。一度しか言わねぇぞ。よーく聞きやがれ！！」

その言葉と同時に部屋の明かりが消え、スクリーンが下りてきた。
スクリーンに映し出された映像には、簡略化されたプラントの絵と連合の駐留艦隊の軍事ステーションの絵があった。

「これが、ユニウスセブン。今俺達がいる所だ」

レーザーポイントで示されたプラントの絵にユニウスセブンと書かれたマークが表示される。

「そんで、これが駐留艦隊。今は二つに分かれている」

大きな凸と小さな凸が前後に少し距離をとる形でユニウスセブンに向かっている。

「先行している艦隊は東アジア共和国の艦隊。んで、こっちが残りの大西洋連邦やユーラシアの連中だ」

そこまで言って、何故かデュークは自身の拳を握り締め始めた。

「俺ぁ、今日この日を絶対ぇ忘れねぇ。お前らもそうだと思っている」

突然語り始めたにもかかわらず、皆は真剣に聞いている。

「ワクワクが止まらねぇんだよ。もうすぐ死ぬかもしれねぇっていうのに、俺ぁ、ワクワクが止まらねぇんだ。お前らもそうだろう！？」

デュークの問いかけに皆が黙って頷く。死など怖くない。我々はこれから英雄になるのだからと。

「敵がどんなにいようと、俺は負ける気なんざいっさいねぇ！！俺は、このプラントを守るって決めてんだ！！　お前らもそうだろう！？　そうだってんなら、やるこたぁわ分かっているだろ！！」

言われなくても分かっている。そういう表情を見せているここにいる者達はすでに決意を決めている者達だ。

「作戦はたった一つ！　シンプルなやり方だ！　見敵必殺（サーチアンドデストロイ）！！　分かったな、テメェら！！」

『オゥ！！！！』

叫ぶ。皆が一斉に叫んだ。

これはたった一つの意味だ。

見敵必殺（サーチアンドデストロイ）。この言葉の意味を理解した彼らは、今戦いを始める。

■■■□□□■■■

先にも述べたことであるが、プラント理事国とは一つの国のことではない。大西洋連邦、ユーラシア連邦、そして東アジア共和国の三カ国のことを指す。

この国々が理事国と呼ばれる所以は、単純に理事国と呼ばれている国々がプラントを建設をしたからだ。プラントはコーディネイターの国と呼ばれているが、そう呼ばれ始めたのは十年ぐらい前からで、実際の所、C．E．69年の今でも正確には理事国が所有しているコロニー（植民地）なのだ。

だからこそ、彼らは得たいのだろう。独立を。自由を。本当に自分たちだけの国を。

だが、例えそう望んだとしても、理事国は決してそれを許そうとしない。

当然の話だ。誰がコーディネイターが住むプラントを作った？

いくらの費用をプラントの建設に注ぎこんだ？　そして、今なお莫大な利益を生み出すプラントを簡単に手放すような国家がどこにあるというのだ？

故に、理事国は自分たちがプラントの所有者であることを示すために艦隊を差し向ける。それが、全て仕組まれたものだと気づかずに。

「先行した東アジア艦隊は、現在我が艦隊の前方、距離３０００に位置しております」

「旗艦リンカーンより通信、『全艦現在の速度を維持しつつ前進せよ』以上です」

艦橋（ブリッジ）にいるクルー達の言葉を聞いて大西洋連邦に所属するネルソン級宇宙戦艦ノリスの副長トモコ・サイオンジ大尉は、腕を組んで今のこの状況について考え始めた。

今回の作戦――――ユニウス制圧作戦は、いつもとは何かが違うと彼女は思っていた。

普段の彼女ら駐留艦隊の仕事といえば、プラントの内部で反乱が起きないかチェックをする程度であって、今回のような『制圧』等という物騒な言葉は使われることは無いはずなのだ。

だが、今回のこの作戦は、作戦名にもある通り『制圧』が目的なのだ。

明らかに異常。こうした案件であれば、ただ威嚇行動に出ればいいだけのものを態々一番相手を刺激するような行動をとる。

これが、彼女と同じ存在の指示よるものなのかそれを確かめる術は今のトモコにはない。

だが、ある程度は予想できたことであった。駐留艦隊上層部――――いや、そのもっと上にいる者の中に彼女と同じ存在がいることはなんとなくであるが、いるという事だけは分かる。さもなければ、

駐留艦隊がこんな、全ての艦艇を合わせれば一個艦隊以上もの戦力を用意していることはないはずだ。

元々、トモコは月にある大西洋連邦の一大拠点プトレマイオス基地に配属されていたのだが、去年突然の辞令により、緊張状態にあるプラント駐留艦隊に配属されることになったのだ。

政治的に見て、この判断は愚策としか取れないだろう。いくらコーディネイターが嫌いであろうとも、プラント理事国は今やプラントから供給されるエネルギーや工業製品なしでは社会が成り立たなくなってきてしまっているのが現状なのだ。

それを態々刺激させるようなことをすれば、いったいどんなことを起きるというのか？　それが分からない程、理事国の国家の政治家は無能ではない。

だがそれならば何故、理事国は駐留艦隊の数を増やし、今回に至っては武力を振りかざすような真似をするのか？　それを理解できるのはこの駐留艦隊ではトモコぐらいかもしれない。

「随分と難しい顔をしているじゃないか。どうかしたのかね？」

「…艦長。いえ、別に……大したことではないです」

ずっと考え事にふけっていたせいか、この艦の艦長であるレガート・アイゼンハワーがその優しそうな目でトモコを見やる。

「……そうか。では、あまりそのような難しそうな顔は艦橋（ブリッジ）ではしないことだ。艦のクルー達に不安が広がるぞ」

そう言われ、トモコは周りを見るが、クルーの顔には不安の表情は無い。寧ろ、笑っている。まるで、娘を見ているかのような微笑

ましさだ。

「リラックスできたかね？」

ニコニコと笑うレガートにトモコの顔にも笑みが浮かぶ。

どうやら、自分はかなり緊張していたらしいと気づいたトモコは礼を言おうと思い、レガートが座っているほうに顔を向け口を開いた瞬間———艦の前方が光った。

「ッ！？」

振り向く。何があったのだと振り向いた時、彼女は目を見開いた。

丸い光。あれが爆発の光だとトモコが気づいたのは直ぐだ。爆発の光は一つだけではない。十、二十、いや三十はあるだろう。

「オペレーター！状況を確認しろ！」

艦橋（ブリッジ）の誰もが放心状態にいる中、そう叫んだのはレガートであった。

「え、あ？　あの？」

「さっさとせんか！」

「あ……り、了解！」

オペレーターが状況を確認するべく通信を取っている中、艦橋（ブリッジ）に緊張が走り続ける。

「……今の爆発は…なんだと思うかね？　副長」

「……ハ、ハッ、ミサイルや機雷であればレーダーで分かりますが……」

「……しかし、反応が無かった」

「…プラントで開発された……何らかの新兵器であると？」

「その可能性が高いだろう」

突然の爆発。レーダーに何も映らなかったにもかかわらず起こった謎の爆発にトモコは更に頭を悩ませた。

何を用いたのか定かではない。それが恐怖を呼ぶ。相手は『空の化け物』と呼ばれるような存在なのだ。何が出てきてもおかしくはない。

だが、それでも心の何処かで恐れが生まれる。

「リ、リンカーンから入電、『東アジア艦隊の損害は微々たるものの、全艦帰還する。なお、作戦は残存する艦隊で続行する』とのこと、です」

気まずい空気が流れる。このままではまた先程のようなことが起きるのではないか？　恐れは更なる恐れを呼ぶ。

「何を怯えているのだ？」

声が艦橋（ブリッジ）に響いた。

皆が声の主の方――――レガートの方を向いた。彼はただじっと前を見ているだけで艦橋（ブリッジ）の方などまるで見ていない。だが、その口から発せられた言葉は間違いなくクルー達に向けられたものだった。

「諸君は軍人だろう？　軍人であれば、命令を遂行せよ。我々の目的地は変わらんのだ。敵が何者であろうとも、先程の爆発が何であろうとも、諸君がやることに変わりはないのだ」

そう言って、黙るレガート。その顔は不甲斐無い部下達に少しばかり失望させられたような顔だ。

だが、それと対照的にクルー達の顔には先程のような恐れはない。今のレガートの言葉をどのように受け取ったかは、人それぞれだが、これだけは共通している。

任務を全うする。

軍人である彼らにとって当たり前のことを再確認した。ただそれだけであった。

「（……そうだったな。私は、変えるためにここにいるんだ。未来を変えるために）」

トモコもまた改めて自分の目的を確認した

地球にいる家族のためにも、絶対にここで勝ってあの未来を阻止しなければならない。そういう思いを持って、トモコは今ここにいる。

この世界にトモコが生まれたその日から知っているこの知識。時には彼女を助け、時には彼女を悩ませたりもした。

ある種の選ばれし者。トモコはその一人だ。だからこそ、知っている。この日を境に、世界は動き始めると。

■■■□□□■■■

「は？　ただの爆弾……ですか？」

ローラシアの艦橋（ブリッジ）で、シリウスはアレクサンドロから聞かされた内容につい呆けてしまった。

「…ああ、さっきの爆発。ありゃただの爆弾だよ。言ってなかったか？」

「え、ええ、東アジア艦隊に何らかの方法でダメージを与え、撤退させるというのは聞いてはおりましたが……機雷ではなかったのですか？」

そう。東アジア艦隊撤退の情報は既にモニターを通じてシリウスも見たのだが、あの数十にも及んだ爆発が、ただの爆弾によって起こされたものであるのならば呆けるのも当然であろう。

「当たり前だろ？　機雷ならレーダーで簡単に捕捉されちまう。だったら、そんなレーダーが簡単に捕捉できないくらいの大きさにすればいい」

「……それが、アタッシュケースに高性能のただの爆弾を……というわけですか」

「そういうことだ」

だが、実際にはそう上手くはいくはずがない。戦艦という巨大な

二百メートルにも及ぶような巨体にダメージを与えるためならば、それなりに近い距離で爆発させなければならないのだ。
だが現実として、上手くいった。これは、他にも何らかの要因があると思ったシリウスだったが、それは直ぐに思いついた。

「……なるほど…彼らですか」

「……」

返事はない。だが、それで構わないとシリウスは思った。今のアレクサンドロの沈黙は恐らくだがシリウスの思いついたことが正解だという意味なのだろう。

アレクサンドロが表に動くのに対して、裏で動いている者たちがいる。それが、ザラ機関。
表向きには国防事務局と呼ばれるただの役所で、彼らの本業は国防に関する事務処理を行う部局なのだが、シリウスはそこに隠されたもう一つの顔を知っている。
国防事務局には、ザラ機関と呼ばれる直轄特殊部隊という非公然部隊を独自に所有しているのだ。
ザラ機関と呼ばれる所以は、その部隊の創設者でもあり、現在のプラント最高評議会議員の一人であり、プラント国防委員会の委員長を務めているパトリック・ザラの娘―――パトリシア・ザラという女性のファミリーネームから取ったものだ。

そして、シリウスの想像の範囲であるが、恐らくザラ機関の構成員が駐留艦隊の軍事ステーションに潜入していたのだろう。そこで何らかの裏工作をした。そう考えるのが妥当だとシリウスは思った。

「東アジア艦隊、Dゾーンに到達。他の艦隊もです」

オペレーターから新たにもたらされた情報。Dゾーンという言葉を聞いた時、シリウスは思考の世界から現実の世界に引き戻された。

「……シリウス艦長。貴官に命令を与える」

「…はっ、何でしょうか？　将軍閣下」

明らかに今までとは違う声質。そして、変な風に演技がかった口調でアレクサンドロはシリウスに言った。だが、ふざけているような言葉とは裏腹に、その言葉は底冷えするような、冷酷な感情が入り混じっているような声だった。

「バトレー、ルシタニア、バルトに通達。全艦第一戦闘配置」

「了解しました！　バトレー、ルシタニア、バルトに通達！　全艦第一戦闘配置！」

「はっ、全艦第一戦闘配置！」

復唱される命令。一気に動き始める艦橋（ブリッジ）でアレクサンドロはずっと右手に持っていた懐中時計を懐にしまい、もう一つの命令をだした。

「エルスマンにも伝えろ！　オペレーション・テイクオフ、これよりフェイズ3に移行する！」

「了解しました！　オペレーション・テイクオフ、フェイズ3に移行！」

オペレーターが全ての者に伝える。

艦橋（ブリッジ）の中、アレクサンドロは一人目を瞑る。

今日という日を待っていた。七年前のあの日、俺は誓った。この世界を変えてやると、どんな手段を使おうとも、変えてみせると。

だからこそ、アレクサンドロは目を開けて言う。

「……テイクオフ（ゲームスタート）！」

今、物語が始まる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3043y/

コズミック・イラに転生者多数発生

2011年11月17日20時33分発行